

地域文化の継承 ～庚申庵の事例に学ぶ～

Preserving Local Culture: Learning from the Case of Kōshin-an

松 井 忍

Shinobu MATSUI

(松山東雲女子大学名誉教授)

地方の大学にとって、そのよって立つ地域に関する学問的知見を地域の現実に沿って活かしていくことは重要な役割のひとつである。そして、その中心的な役割を学生が担うことは、地域社会の必要とすることでもある。近年は、学生が地域の課題に取り組み、現実の場で地域住民と関わることによって大きな学びを得る、という事例が多く見られるようになった。しかし、20年余り前はまたそうした先例はほとんどなく、庚申庵の事例はきわめて先進的な事例だったと言えよう。松山東雲女子大学創立30周年の記念の年に当たって、その経緯をまとめておくこととする。

庚申庵は、江戸時代の松山の俳人栗田樗堂が建てた草庵で、200年近くの間、何度かの増改築を重ねながら大切に遺されてきたものである。愛媛県の史跡に指定されて以後も個人が所有、管理していたが、傷みが激しく倒壊の危険が噂されていた。そこで、担当していた日本文化演習の授業の中で見学させていただくこととした。学生たちは、すぐに庚申庵の風情に大きな魅力を感じ、何とか保存することはできないかと考え始めた。その後、授業では庚申庵について調べるとともに、愛媛県や松山市の文化財担当部署に現状を問い合わせ、詳しいお話を伺い保存活用について意見を出し合うことになった。学生たちの行動力と発想の柔軟さには驚かされるばかりだった。

ちょうど議論を重ねていたころ、松山市が「学生による政策論文」を募集するとの情報を得、学生たちに伝えたところ、即座に応募することに意見がまとまった。学生たちから論文をまとめるために補講をしてほしいとの要望があり、授業時間とは別に時間をとったが、論文の構成・提言の内容などを議論し、国際文化学科2年の数名の学生を中心に論文の形にまとめることが決定された。完成した論文は、未熟さを持ちながらも熱意のこもった明確な主張の表現されたものであった。論文は、松山市に提出され、2000年2月、第1回「学生による政策論文」において優秀賞に選ばれた。学生たちの授賞の喜びは大きかったが、それよりもその後、松山市が庚申庵を公有化し、庚申庵史跡庭園として整備することが決定されたときの驚きは特別なものであった。学生たちにとっては、自分たちの提言が取り上げられ、実際に政策として実現されることの喜びはもちろんのこと、それ以上の責任を感じたことが伝わってきた。こうして松山東雲女子大学の学生たちは、受賞後の政策

実現の過程で実践的に地域の課題に取り組む機会を得ることになったのである。

庚申庵が解体整備される間、松山市の担当者と学生たちとの話し合いの時間が複数回もたれ、今後の活用方法などについての考え方が共有された。論文の中でも、その後の話し合いの中でも学生たちが主張していたのは、庚申庵を単なる観光スポットとしてではなく、松山市民が何度も訪れたいと思えるような場所にしたいということだった。庚申庵主の栗田樗堂が、連句の座として、また煎茶の庵として、その閑寂の時間を楽しんだという文化史的意義を踏まえた上で、静かに過ごす貴重な時間を持つことのできる身近な場所として親しんでほしい、ということだった。

2003年5月3日に庚申庵史跡庭園として開園することが松山市によって決定された。庚申庵の整備と開園後の活用については、庚申庵整備検討委員会が組織され、学生たちの意見を代弁するために私もその一員として参加することになった。委員会では、従来の行政による管理ではなく、民間の組織による新しい管理活用が望ましいとの結論が出され、それに伴って、2003年2月にNPO法人GCM庚申庵倶楽部（以下、庚申庵倶楽部）を設立し、新しく誕生する庚申庵史跡庭園の管理活用を担うことになった。NPO法人自体がまだなじみのないもので、民間の組織が文化財の管理活用を担うという先例もない状態でのスタートであった。そのうえ、もう一つの大きな問題は、論文を書いた学生たちが既に本学を卒業し、ほとんどの者が松山を離れていたということである。そこで、新たに学生たちに参加を呼びかけることにした。11名の学生が庚申庵倶楽部の会員として協働してくれることになった。庚申庵倶楽部は、本学学生のほか、庚申庵の解体調査に関わった建築の専門家である松山東雲短期大学の犬伏武彦（敬称略）、郡司島宏美、ボランティア活動の専門家である本学の小泉勇次郎、学長の別府恵子、事務局の山内司の各氏のほか、近世文学の専門家、樗堂や地域文化の研究者、庚申庵の元の所有者、庚申庵の所在地である味酒地域の町内会の代表といった多彩な方々が参加してくださることになった。地域の方々と松山東雲学園の関係者による協働が始まったのである。

5月の開園までの準備は、慌ただしく進められた。学生たちは、庚申庵のガイドとしての講習を受け、実際に現地でのリハーサルを繰り返した。そのほか、開園記念式典やお菓子コンテスト、味酒小学校の子供たちによる発表、天野祐吉氏の記念講演とパフォーマンス、渡部章正写真展など多彩な開園記念イベントのための準備も同時に進めなければならなかった。5月3日から5日まで続くこれらのイベントでの学生たちの活躍は目を見張るばかりだった。3日間の来園者は4,000人を超え、周辺の交通整理をしなければならないほどの賑わいだったが、学生たちはイベントの運営、ガイドなどをこなしながら終始笑顔で来園者を出迎えた。来園者からは「ありがとう、頑張ってるね」との感謝や慰労の言葉がかけられていた。学生たちにとっては、その言葉が何よりのご褒美だったようで、笑顔はますます輝いているように思われた。地域社会から必要とされていることを実感できた経験は、学生たちにとって大きく、大学生生活自体の充実はもちろん、社会に出てからの活躍の原動力にもなったようである。大学の中での学びだけではなく、実際に大きな責任を担って地域社会に貢献できたことは東雲教育の大きな成果と言えよう。

庚申庵開園から20年を経て、学生との関わりがなくなっていることは残念だが、時折大学で庚申庵の話をする機会が与えられているのは、ありがたいことである。実際の社会の中ではいまでも男女共同参画が叫ばれており、真の意味での実現にはまだ至っていない現状がある。しかし、女子教育の場では、ひとりひとりがリーダーシップをとることが必要とされ、主体的にかかわらなければならない。庚申庵の活動は、学生たちの主体的な働きがなければ実現しなかったものであり、地域協働の先進的活動を推進した彼女たちのしなやかさとしたたかさに拍手を送りたい。そして、彼女たちの活動を支え、力を貸してくださる多くの地域の人々の存在に感謝したい。

庚申庵の20年の歩みを振り返って、地域の中で学びその成果を地域に還元し、ともに継承していくこと、それが地域にある大学の大きな使命であることを改めて感じるものである。